# 鈴木仙太朗氏寄贈資料

## １　資料の名称および数量

(1) 湖東焼 青磁牡丹陰刻文花生　　1口　他22件(令和6年9月30日受贈分)(計23件)

(2) 湖東焼 染付龍柳鴨釣瓶形花生 1対　他59件(令和7年1月16日受贈分)(計60件)

## ２　資料の概要

鈴木仙太朗氏が収集された湖東焼および関連陶磁器83件です。いずれも美術的価値および資料的価値の高い作品であり、質量ともに優れた貴重なコレクションです。

湖東焼は、江戸時代後期から明治時代に、彦根で制作されたやきものです。文政12年(1829)、彦根城下の商人絹屋半兵衛らが開窯し、後に彦根藩が召し上げて直営化し、井伊家12代直亮(なおあき)と13代直弼(なおすけ)、14代直憲(なおのり)のもとで発展しました。全国有数の高い技術に裏打ちされた湖東焼の優れた品質は、現在も高く評価されています。伊万里焼や瀬戸焼、九谷焼などに比べて現存作品が少なく、その希少性からも注目されるやきものです。

本コレクションは、希少な藩窯期の作と判断される湖東焼が多く含まれ、また、明治時代に藩窯湖東焼を復興した円山湖東焼や長浜湖東焼の作品、湖東焼の元職人が近代以降に京都などで制作した作品も含まれており、当該コレクション全体を見通すことで、湖東焼の歴史を一覧することができます。

## ３　主な資料の写真および解説

### (1) 湖東焼(ことうやき) 青磁牡丹陰刻文花生(せいじぼたんいんこくもんはないけ)　１口

口径6.0cm 底径9.3cm 高29.0cm

江戸時代後期

緑味の強い釉を厚く全面にかけた青磁(せいじ)の花生。胴には、牡丹唐草文や幾何学文を浅く線刻しています。青磁は、全面を青緑色で彩った磁器で、中国では紀元前にはすでに作られていました。湖東焼でも中国の青磁を範とした制作が行われましたが、比較的小規模の制作であったのか、その現存作品は多くはありません。

本作は、青磁釉の発色が良好で、均整のとれた器形や堅く焼き締まった素地、精巧な絵付が出色の優品です。作風から、湖東焼が安定的に制作されるようになった藩窯後期の作と判断されます。なお、本作の底部には「湖東」の押印があり、これは、伝承によると井伊家13代直弼の指示の下で安政3年(1856)以降に用いられたとされるものです。

**(2) 湖東焼 染付 龍 柳 鴨釣瓶形花生　１対**

口径13.0cm 底径12.8cm 高13.8cm

江戸時代後期

全体に釣瓶を象った花生。内部に竹を模した持ち手を、胴に箍の縄目を模した筋をあしらっています。側面の全体には、水鳥が遊ぶ水辺の情景と雲龍の文様を、鮮やかな藍色で巧みに描いています。

本作は、白地の素地の上に呉須という青色に発色する顔料で絵付をし、その上に釉薬をかけて高温で焼成する染付の技法で制作されています。藩窯期の湖東焼では、高品質の呉須が使用され、染付の優品が多く作られました。呉須の発色が良く、華やかな雰囲気をもつ本作は、藩窯湖東焼ならではの作品といえます。

**(3) 湖東焼 青手九谷 写 菊 蝶 文皿　５枚**

口径15.4cm 底径6.9cm 高2.8cm

江戸時代後期

江戸時代に加賀(現在の石川県)あるいは伊万里(現在の佐賀県)で制作されたとされる九谷焼を写した作品です。

青と緑、黄を中心とする鮮やかな色釉で菊と蝶を描いた意匠や、見込の周縁部に見られる緑地に点をちりばめる表現は、九谷焼の中でも、「青手」と分類される作品に特徴的な表現です。湖東焼は、伊万里、瀬戸、加賀など各地の窯から工人を招いて技術の向上に努めており、こうした名窯写しも作られました。

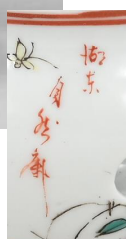
**(4) 湖東焼 色絵花卉図夜学蓋置 自然斎絵付　１口**

口径4.7cm 底径3.6cm 高4.7cm

江戸時代後期～明治時代初期

蓋置は、茶釜の蓋などを乗せて用いる道具です。本作は、緑や薄紅、黄などの華やかな色釉を用い、軽やかな筆ぶりで花卉模様を描いています。

胴の銘から、本作は湖東焼の絵付師、自然斎(1821～77)の作とわかります。自然斎は、中山道鳥居本宿に住み、株仲間を結成して藩窯の素地を仕入れて制作を行い、細かな絵付の優品を残しています。



(5) 湖東焼 赤絵金彩唐人物図急須 赤水絵付　１合

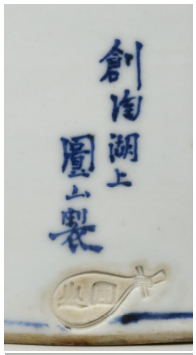
口径5.6cm 底径5.4cm 高8.2cm

江戸時代後期～明治時代初期

軽快さを感じさせる巧みな筆遣いの絵付が映える急須。江戸時代後期に加賀地方で制作された九谷焼の赤絵細描作品の影響下で作られた品です。

赤水は、中山道高宮宿の人で、藩の許可を得て藩窯の素地を仕入れて絵付を行った民業赤絵湖東焼の絵付師のうちの1人です。

(6) 円山湖東焼 染付楼閣山水図筒花生　１口



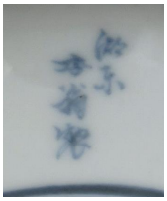
口径10.2cm 底径12.4cm 高26.8cm

明治２年(1869年)

山水と楼閣を描いた筒形の花生。円山湖東焼は、井伊家14代直憲が、殖産興業の一環として明治2年9月に創始したやきものです。京都から招かれた陶工の明石屋初太郎が中心となって制作され、九州から取り寄せた天草石や地元の物生山石など、湖東焼と同じ原料も一部で用いられました。

本作は、胴の「己巳晩秋駐湖上」と銘が入っていることから、円山湖東焼が創始された明治2年(1869)の秋に制作された品であることが分かります。小品が多い円山湖東焼の中では珍しい大ぶりな作品で、洒脱な筆法の絵付が一際目をひく優品です。

(7) 長浜湖東焼 染付花卉に漢詩書付急須　１合



口径4.7cm 底径5.1cm 高6.4cm

明治3～6年(1870～73年)頃

長浜湖東焼の急須。長浜湖東焼は、長浜の医師西村善吾が明治3年(1870年)に自邸に窯を築いて始めたやきものです。長浜は、地理的には湖東ではなく湖北に位置しますが、長浜湖東焼では湖東の銘が用いられており、湖東焼のブランドを継承する意図をもって焼かれたやきものといえます。

長浜湖東焼では、湖東焼の藩窯の元職人が雇われて素地作りを担い、絵付は善吾が自ら行ったと伝わります。本作のように、西洋の水彩画を思わせる華やかな花模様をあしらった絵付作品が比較的多く見られます。

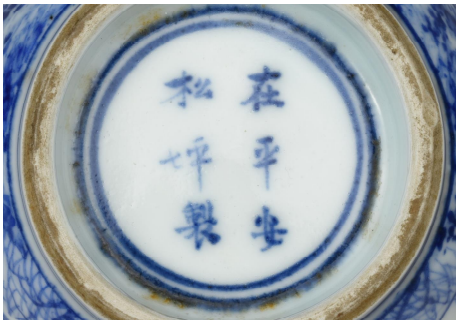
(8) 染付釉裏紅山水図盃洗 井上松坪作　１口

口径14.0cm 底径6.5cm 高9.1cm

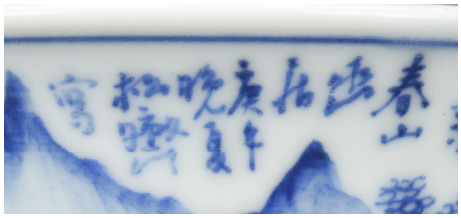
明治3年(1870年)

井上松坪は、もとは瀬戸焼の職人で、安政3年(1856年)から7年に湖東焼藩窯で抱えられて絵付を行った人物です。明治時代に京都で作陶し、染付や色絵、金彩などで華やかに絵付を施した磁器を制作しました。

本作は、松坪が京都へ出て間もない頃の作品で、染付による藍色の絵付を基調としながら、部分的に薄紅色の彩色を加えています。これは釉裏紅と呼ばれる難易度の高い技法であり、彼の作陶技術の高さをよく伝えています。側面に「春山幽居庚午晩夏松巒写」、高台内に「在平安松坪製」の書付があり、制作年が庚午(明治3年)であること、松巒なる人物が絵付をしたことが分かります。




井上松坪の他に、幹山伝七や若林寿山、奥村松山などの藩窯湖東焼の元職人が明治時代に京都で活躍し、近代京焼の隆盛に尽力しました。



＊写真の作品のうち(1)～(5)については、令和7年3月20日(木･祝)～4月20日(日)の期間、彦根城博物館展示室で公開します。